

選者 川口孤舟

投句・選句 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 熊谷くにお 久米五郎太 後藤とみ子

小早健介 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 高橋康敏 田島正己

土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 西澤國護 長谷見びん 福島正明

古川百合子 古田昇 星田啓子 山崎亜也 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎くすを 重枝考岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆

山本三恵

【互選句】○は会員選者の特選 ◎は青葉会、孤舟選者の選

九点 ◎己が影抱きて果てし冬の蝶 くにお (孤・○五・清・び・允・○啓・百・三・盛)

◎目には目の戦史積りてガザの冬 びん (紀・健・孤・○堂・清・○正・百・昇・啓)

◎百舌去りて一枝の震え残りけり 全 (孤・恵・た・康・雅・允・啓・亜・三)

八点 夢共に生き来し我家落葉掃き 雅夫 (紀・忠・孝・○龍・清・國・隆・正)

七点 糸玉祖母の手秤確かなり とみ子 (く・清・康・堂・雅・百・啓)

六点 鉢巻で植木屋となる秋の庭 正明 (忠・五・と・啓・天・盛)

母の忌や物言ひたげな返り花 昇 (○そ・○くす・孝・己・び・○規)

冬あかね茶席を仕舞ふ割烹着 亜也 (紀・くす・恵・堂・正・啓)

五点 運動会子供等みんな志士の顔 忠彦 (紀・健・龍・己・昇)

七歳にをみなの色香七五三 孤舟 (そ・忠・堂・規・○盛)

蛾眉の月湖上に懸かり薄紅葉 全 (健・た・ゆ・允・三)

首の無きロダンの像や憂国忌 全 (く・と・康・○昇・亜)

落ち葉降る人なき町の昼下がりに 五郎太 (た・ゆ・雅・國・規)

そぞろ寒夜明けのこむらがえりまた 千恵 (紀・く・恵・昇・三)

湯の宿の川面彩る薄紅葉 全 (紀・そ・た・國・允)

◎雪吊りにしとど雨降る裏日本 びん (孤・千・龍・己・啓)

綾を織るごとく池面の散紅葉 昇 (そ・恵・ゆ・雅・盛)

◎鋭角に冬陽差し込む高架下 啓子 (紀・く・孤・堂・亜)

自分史に横道は在り冬木の芽 盛雄 (紀・くす・五・と・孝)

四点 逝く友に自伝書く友冬初め 五郎太 (紀・健・○千・龍)

折り合ふて限りあること片時雨 とみ子 (くす・五・孝・正)

遠山の輪郭著(しる)く冬に入る 恵洲 (た・孝・百・三)

曲がる度山茶花に逢ふ散歩道 康敏 (忠・く・雅・規)

晩秋の空見上げつつ妻逝けり 規雄 (健・○允・び・百)

◎熱爛や吾にも若き日は在りし 盛雄 (紀・忠・孤・隆)

ラガーらの髭もタトゥーもノーサイド 全 (紀・龍・康・堂)

三点

携帯に女性の名出る小春かな  
◎吾もまた絶滅危惧種温め酒

五郎太

(紀・くす・忠)

待ちかねし干柿残りあとふたつ

健介

(紀・孤・昇)

新司てふ五線の旅人寒昂

千恵

(ゆ・正・天)

幼児の小走り愛らし秋さやか

堂哉

(紀・健・清)

コスモスとゆれて語るや老い疲れ

ゆたか

(そ・龍・國)

秋風にツケ場の煙千曲川

雅夫

(紀・ゆ・三)

武蔵野の夕日に沈む枯木立

國護

(紀・己・亜)

山茶花や垣なき村のクリニツク

全

(そ・た・允)

不意打ちの嚏(くしゃみ)でばれし若づくり

びん

(恵・昇・亜)

冬天へメタセコイアの円錐形

啓子

(紀・五・と)

神在月老いし妹らはみな達者

天牛

(紀・く・亜)

御堂筋へ虎の雄叫び冬うらら

盛雄

(紀・と・康)

二点

顔見世や仁左の芝居を歌六締め

紀久男

(と・千)

◎青げらのちよこまかちよこまか忙しなく

全

(孤・天)

(青げらは啄木鳥の仲間)

神宮外苑銀杏並木再開発計画

世界遺産に推挙の動き銀杏散る

紀久男

(千・隆)

冬晴れや遂に手にする日本一

忠彦

(紀・盛)

そのままか砂糖で煮るか冬りんご

五郎太

(くす・天)

地下壕より少女の俳句冬の星

とみ子

(紀・規)

年来の友癌と聞く秋深し

千恵

(紀・び)

鐘太鼓聞けば浮き立つ秋祭り

ただしげ

(紀・隆)

黄落や寺の瓦に葵紋

康敏

(紀・天)

日の暮れに野火かと惑う紅葉山

正己

(千・雅)

どの家と言わず木犀匂う町

國護

(び・規)

秋晴れの空を吸いこみ吸わるるや

百合子

(紀・清)

この空地建替えまだき枯葎(かれむぐら)

啓子

(己・隆)

日野かぶら紅きに宿る苦味かな

亜也

(紀・恵)

◎二日目の巻織汁(けんちんじる)のうまさかな

天牛

(孤・百)

一点

新走り送った友から新走り

忠彦

(千)

石路の咲く齒科医院行く覚悟して

全

(紀)

友和さん叙勲良き顔文化の日

全

(紀)

牡丹焚く火焰に舌と翼あり

孤舟

(○康)

山茶花の散つてはなやぐ憂国忌

くにお

(正)

神無月古楽の会のカンタータ

五郎太

(紀)

猛牛を退けし虎冬ぬくし

健介

(堂)

姑御に程よく出来し蕪蒸

とみ子

(紀)

大丈夫言ひつ手を借る冬支度

全

(ゆ)

新蕎麦や酒をお供にほんのりと 　　ただしげ  
 気まぐれのゴジラ観に出る小春かな 　　恵洲  
 木枯の龍馬像過ぎ海に出づ 　　康敏  
 年重ね病は村時雨に似て 　　正己  
 初冬の庭の 片付け妻「お茶よ」 　　堂哉  
 紅葉のトンネル抜けて青き空 　　ゆたか  
 瀬戸の島紅葉映える波の間に 　　全  
 秋パスタ漂う香りポルチーニ 　　國護  
 知らぬ間に一枝置かれ木犀香 　　全  
 旧式のクレーンが六基小樽冬 　　びん  
 紅葉して赤き実付ける枝の欲し 　　啓子  
 電柱にへのへのもへじ秋暮るる 　　全  
 ◎下校告ぐチャイムの音や秋の声 　　正明  
 頂きし野菊の香り部屋に満つ 　　規雄  
 (紀) (紀) (百) (盛) (國) (國) (紀) (び) (五) (紀) (孤) (隆)

【句 評】

九点句

己が影抱きて果てし冬の蝶

くにお

孤舟選者・・・生きていた姿のままで地面に横たわる冬の蝶は悲しい。

五郎太さん・・・冬の弱い日が射すなか、動かなくなった蝶。静謐で寂しい句を天にいただきました

百合子さん・・・人生も同じかと・・・

啓子さん・・・命の果てた蝶を目の当たりにして、ふと、自分、或いは人の運命を想われたでしょう。作者のしんとした想いが滲み出て深く美しい句と感じます。

盛雄さん・・・動きも鈍くなりながら、尚も蜜を求める冬蝶。上五、中七が見事。

目には目の戦史積りてガザの冬 　　びん

孤舟選者・・・どんな理由があれ報復の繰り返しでは問題は解決しない。

堂哉さん・・・全くやりきれない争いですね！

正明さん・・・僕は近くと言えは、エジプトとイランとトルコの三国には少しは知識があります。この辺りの国々は千年単位で歴史が語られます。胸が痛む句ですね。

百合子さん・・・歴史はある意味で戦史とも言えるのではないかと。せつかく生まれたのに理不尽にも奪われた命、歴史の中にはどれほどの死屍累々の山が築かれているのでしょうか。

百舌去りて一枝の震え残りけり 　　びん

孤舟選者・・・百舌がざわざわと枝から飛び立った。

ただしげさん・・・百舌の飛び去った後の表現が面白い。

恵洲さん・・・平凡な写生句と言えど、いい味わいです。少し名残惜しいのかな？

康敏さん・・・百舌は小鳥の中では大型で動きは活発だ。木の枝から飛び去った後の枝の震えを巧みに捕らえた。

三恵さん・・・百舌は獲物にとっておそろしい鳥と聞いたことがあります。凍てつく寒さ、恐ろしさ、飛び立った後の余韻と三つ合わさって「震え」に凝縮されていると感じました。

## 八点句

夢共に生き来し我家落葉掃き

雅夫

隆さん・・・若い時は思わなかったが、結局すべては夢であると思う。

龍平さん・・・我が家に対する愛しさは齢を重ねる毎に募るばかり　嗚呼！

## 七点句

糸玉祖母の手秤確かなり

とみ子

康敏さん・・・テレビで片手に乗せた物の重量を当てるゲームがありますが、このおばあ様なら即正解ですね。

堂哉さん・・・確かに父や母の目分量は正確でした！

百合子さん・・・編み物に限らず、家事をしつかりとこなして得た経験の確かさは見事です。

祖母や母に、匙加減を訊くと答えはいつも「うーん、それは大体の勘」

啓子さん・・・日常生活の中に極く自然に句材を見つけられ、且つ温かな眼差しが見える。作者の人生の過ごし方までも窺われるようです。

## 六点句

母の忌や物言ひたげな返り花

昇

規雄さん・・・返り花を見て、何かしら言いたげな亡母を思い出している、作者の心情を想います。

鉢巻で植木屋となる秋の庭

正明

とみ子さん・・・仕事は、まず形からでしょうか。

天牛さん・・・帽子でなく鉢巻をする人はあまりいませんね、今どき。

盛雄さん・・・鉢巻一つでプロの植木屋の気分になる。

冬あかね茶席を仕舞ふ割烹着

亜也

恵洲さん・・・冬茜、茶室、割烹着の「三題嚙」が味わい深い。割烹着を和服の上に着ていた母が好きでした。割烹着に弱いのです。

堂哉さん・・・とても素敵で綺麗な景色が浮かんできました。

正明さん・・・佳作。もう少し色気があるともっと良いでしょう。

## 五点句

運動会子供等みんな志士の顔

忠彦

龍平さん・・・様変わりの著しい世界情勢　立派な日本志士が多数誕生してほしい。

七歳にをみなの色香七五三

孤舟

堂哉さん・・・最近の子どもの成長は早いですね！

盛雄さん・・・何事にも興味のある、おませな女の子。中七がいいですね。嬉しい一句。

蛾眉の月湖上に懸かり薄紅葉

孤舟

ただしげさん・・・湖上に細い三日月が掛かり、薄く紅葉した木々と共に秋の寂しさを思わせる。ゆたかさん・・・優雅な景色が臉上に浮かびます。

三恵さん・・・水墨画のモノトーンにうつすらと水彩絵の具で着色されている。そんな幻想的な光景が目には浮かびます。

※くにおさん・・・蛾眉山にのぼった月が煌々と湖面を照らしている雄大な素晴らしい秋の夜の景です。その中で下五の「薄紅葉」が気になりました。夜間に紅葉の色の濃淡まで果たして識別できるでしょうか。夜と昼の情景が一つの画像に混在するのは写生句としていかがでしょうか。たいへん勿体ない気がしました。

※康敏さん・・・蛾眉（眉の月）と薄紅葉の季重なりです。

落ち葉降る人なき町の昼下がりに

五郎太

ただしげさん・人の往来もなく、ひっそりとした街の様子が寂しい。

ゆたかさん・閑散とした町の雰囲気がよく分かります。

そぞろ寒夜明けのこむらがえりまた 千恵

恵洲さん・これ痛いんですね。枕元にツムラの特効薬「芍薬甘草湯」（湯と言っても粉末

ですが）を常備しているものとして共感の句。

湯の宿の川面彩る薄紅葉

千恵

ただしげさん・このような湯の宿でのんびり、ゆっくり湯につかりたい。

首の無きロダンの像や憂国忌

孤舟

康敏さん・ロダンの首なら角川源義の句がある。首の無いロダン像は見たことないが、

あのおどろおどろしい現場写真と呼応する気がしてきた。

昇さん・三島由紀夫の凄惨な最期を思い出します。不世出の作家でした。違うやり方

がなかったのかと悔やまれます。

亜也さん・「考える人」の肉体が理想だったとか。

雪吊りにしとど雨降る裏日本

びん

孤舟選者・この時期の裏日本は冷たい雨の連続で、やがて雪の毎日となる。

千恵さん・雪吊りは美しい風景です。もう冬支度は万全ですがまだ裏日本地域は雨降りが

続いているのです。

綾を織るごとく池面の散紅葉

昇

恵洲さん・唱歌「紅葉」の二番の最後「水の上にも織る錦」を思い出させます。この歌が

好きなこともあって採りました。

ゆたかさん・綾を織るという表現が見事です。

鋭角に冬陽差し込む高架下

啓子

孤舟選者・夕方の新橋ガード下の屋台の一杯飲み屋。

亜也さん・デ・キリコの世界？

紀久男・大阪や新橋ガード下と思いますが中七の表現が良い。

自分史に横道は在り冬木の芽

盛雄

とみ子さん・横道にも冬の木の芽のような芽吹きが楽しみですね。

## 四点句

逝く友に自伝書く友冬初め

五郎太

千恵さん・長く生きていれば自分含め近い人々にもいろいろなことが起こります。

「冬初め」という季語にもそんな気配を感じます。

龍平さん・人生イロイロでも一体誰が寿命を決めているの？

折り合ふて限りあること片時雨

とみ子

五郎太さん・まあいいかと思ってもやはりダメか。何についてのことか想像を促します。

片時雨の季語が効いています。

※孤舟選者・折り合ふて↓「折り合ひて」「折り合うて」と、「て」の前には連用形を使

うことで正しい旧仮名使いになります。

遠山の輪郭著（しる）く冬に入る

恵洲

ただしげさん・遠くの山々がくつきりと見え、冬の澄みきった空を思わせる。

百合子さん・坂のてっぺんから眺める富士山、空気がぴりっとしてくるとその輪郭がくつき

りとして、ああ、また冬がやって来た！特に朝焼け、夕焼けを背景にした

富士山にはいつも心が洗われます。

### 晩秋の空見上げつつ妻逝けり

規雄

允章さん・・・仲の良い幸せな夫婦だったのでしよう。中七の措辞が素敵です。

百合子さん・・・私も空に吸い込まれるようにして逝きたいと思っています。父の時は炉から昇る煙の行方を見送っていました。母の時は電気炉だったので煙は見えなかったけれど、「空に昇りゆけり」と感じました。

### 熱爛や吾にも若き日は在りし

盛雄

孤舟選者・・・今でこそ爺むさい熱爛をチビチビやっているが、若い頃はウオッカを呷っていたものだ。

隆さん・・・酒量もめつきり減り久々に手にした熱爛に眩く。

### ラガーらの髭もタトウもノーサイド

盛雄

康敏さん・・・むさ苦しい大男の集団も試合が終わればノーサイド。

堂哉さん・・・確かに試合後のラガーの挨拶は気持ちいいですね！ノーサイドは貴重な言葉、精神ですわね！

紀久男・・・特選に採りたかったが開幕は12月6日なので・・・。

## 三点句

### 吾もまた絶滅危種温め酒

健介

孤舟選者・・・この年齢になり、急速に移り変わる現代の風潮に付いてゆけなくなった。

### 待ちかねし干柿残りあとふたつ

千恵

ゆたかさん・・・残りあとふたつという表現で干柿が好物であることを暗示していることが素晴らしいです。

天牛さん・・・年配の者にとっては甘味は欲しいも、干柿のたぐいでしたから。この気持ちがよくわかります。昭和も遠くなりましたね！！

### 新司てふ五線の旅人寒昇

堂哉

健介さん・・・私も下手ながら少し楽器を触るので、五線という表現に感じ入りました。

### コスモスとゆれて語るや老い疲れ

雅夫

ゆたかさん・・・私も疲れやすい年になりました。

### 秋風にツケ場の煙千曲川

國護

※ツケ場・・・國護さん自解・・・やな場と同義ですが、信州でひと月ほどのものです。

### 武蔵野の夕日に沈む枯木立

國護

ただしげさん・・・冬の寒々とした風景が見て取れる。

### 山茶花や垣なき村のクリニツク

びん

恵洲さん・・・住民皆が家族のような村に、人望厚いお医者さんの小さなクリニツクがあるのですね。山茶花が良く利いています。

### 不意打ちの嚏(くしゃみ)でばれし若づくり 百合子

孝岳さん・・・最近では急にくしゃみをするのが多くなりました。これが加齢現象とは。我がことのように恐れ入りました。

天牛さん・・・刈り上げたか、薄着をしたか、この際しなれぬことはやめたほうがいいですわね。

### 冬天へメタセコイアの円錐形

啓子

五郎太さん・・・太古からある大木は空に聳える。人が手入れせずともコーン状に自らを整え、葉も落とす。自然の妙。

とみ子さん・・・自然の造形の見事さが、くつきりと表現されていると思います。

神在月老いし妹らはみな達者

天牛

亜也さん・・・出雲人に幸あれ。

御堂筋へ虎の雄叫び冬うらら

盛雄

康敏さん・・・パレードに御堂筋は三十五万人の人出。一九三五年創立でやっと二度目の

日本一。不思議な感あり。

## 二点句

顔見世や仁左の芝居を歌六締め

紀久男

とみ子さん・・・顔見世らしいお芝居が想像されます。

千恵さん・・・恒例の豪華な公演です。中七・下五のリズムが心地よいです。

※紀久男自句自解・・・「松浦の太鼓」です。吉右衛門の當り役を仁左衛門が演じ播磨屋一門の長老が舞台を引き締めた。上方では「土屋主税」がこれに似て、先代の鴈治郎が演じてきました。いまの鴈治郎は助六の通人をやるなど喜劇的な役割もやりますが、些か情けない思いを禁じ得ません。

青げらのちよこまかちよこまか忙しなく 紀久男

(青げらは啄木鳥の仲間)

孤舟選者・・・青げらの機敏な動き。擬態語がよい。

天牛さん・・・啄木鳥は木を打つ音も、行動も決してのんびりしていませんものね。

神宮外苑銀杏並木再開発計画

世界遺産に推挙の動き銀杏散る

紀久男

隆さん・・・神宮外苑は関東大震災復興事業として生まれた。造園家、都市計画家で知られた帝都復興局公園課長 折下吉延の功績が大きい。折下は、近代都市には市民の癒しや憩いの緑の空間が必要不可欠と考えていた。隅田公園、山下公園(横浜)も折下が担当した。

冬晴れや遂に手にする日本一

忠彦

盛雄さん・・・タイガース、オリックスの御堂筋、三宮ぱれどに百万人の人出。盛り上がりました。そしてサッカー<sup>①</sup>ではヴィッセル神戸の初優勝。灘の銘酒も喜んでいます。

五郎太

天牛さん・・・「リンゴジャム」ですか。沢山つくって一年分のトーストの朝食用でしょうね。

鐘太鼓聞けば浮き立つ秋祭り

ただしげ

隆さん・・・一年の刻を知らせる鐘太鼓でもある。浮き立たないわけにはいかない。「年寄りて耳で楽しむ秋祭り」はいかが。

※句中で、大きさを考えた場合「鉦太鼓」の文字を使用した方が、良いかとの意見あり。

黄落や寺の瓦に葵紋

康敏

天牛さん・・・紅葉狩りに古い寺を訪ねられたのでしよう、はつと気が付けば葵の御紋ですか。紀久男・・・芝の増上寺一帯がびったりでしょうか。

この空地建替えまだき枯葎(かれむぐら)

啓子

隆さん・・・空地は増え続ける。主は去って遺る固定資産税。

日野かぶら紅きに宿る苦味かな

亜也

恵洲さん・・・日野蕪を知らないのですが、紅いところに宿る仄かな苦みが、いい風味なのですね、きつと。

二日目の巻織汁(けんちんじる)のうまさかな 天牛

孤舟選者・・・作ってから時間が経つと味が寝かされ染みる所為かおいしく戴ける。

百合子さん・・・同感です！ 豚汁も、おでんもですね。冬はうまいものがいっぱい。

一点句 猛牛を退けし虎冬ぬくし

健介

堂哉さん・・・岡田阪神おめでとう！野球に続きサッカーも神戸が初優勝です！

牡丹焚く火焰に舌と翼あり

孤舟

康敏さん・・・須賀川牡丹園の牡丹焚火は今年も十一月十八日に開催された。めらめらと高く

燃え上がった炎に舌と翼を見た感性は鋭い。

大丈夫言ひつ手を借る冬支度

とみ子

ゆたかさん・・・私もいろいろと手を借る年になりました。

※康敏さん・・・令和五年二月会報九枚目の第二句につき、孤舟選者が「つ」と「つ」の用法につき解説されています。読んで推敲してみたら如何でしょうか。

年重ね病は村時雨に似て

正己

百合子さん・・・『村時雨』の一語ですべてを語り尽くしていると思いました。

旧式のクレーンが六基小樽冬

びん

紀久男・・・「旧式のクレーン」今どき珍しいレトロな港町。大阪の社員時代、小樽出張でよくご馳走になりましたが一人で飲んだアイヌのウタリでの熱爛が忘れられません。

下校告ぐチャイムの音や秋の声

正明

孤舟選者・・・子供達の安全な下校を願うチャイムの音。留意点としては、告ぐ ↓ 告ぐる（連体形、上6になっても） 秋の声 ↓ 秋の夕 では。

※くにおさん・・・三段切れの句がすべて悪いとは申しませんが、この場合は字余りになっても「告ぐる」という「告ぐ（終止形）」の連体形で「チャイムの音」に繋げることでどうでしょうか。

頂きし野菊の香り部屋に満つ

規雄

隆さん・・・秋はなにもかも澄み、ほのかな香りさえ漂う。

「菊の香や奈良には古き仏たち」（芭蕉）と同じ景色か。

~~~~~

## 【次回および次々回 青葉会】

2023年12月14日(木) 13時より青葉会句会(納会) 於：世田谷区三軒茶屋 世田谷区施設

17時より青葉会忘年会 於：銀座アスター三軒茶屋賓館

参加者は出句3句。ご投句の方は2句、を目処としてご提出いただけます。

12月12日(火)中の締め切。編集の星田啓子までお送りください。

新年の初句会

2024年1月25日(木) 13時より青葉会句会 於：丸紅本社 4階会議室

参加者は出句5句、ご投句は2句を目処としてご提出ください。

締め切りは、1月23日(火)中。編集の星田啓子までお送りください。

## 【青葉会報】

一、11月23日の句会は、いつもの三軒茶屋の世田谷区施設にて、長谷見びんさんをはじめとして6名の

参加を見て活発な披露の模様を伺いました。今回は句会から発効まであまり時間が取れず、選句締切も急いでいただきましたが、皆さまのご協力のお蔭で、実は予定より1日遅れましたが、何とかお届けできます。今回の最高得点は9点で、くにおさん、びんさん（2句）でした。本年の句会は次回12月14日の句会で納会となります。郵送の方はそれまでにこの会報はお手許に届けられない郵便事情ですが、ご容赦お願い致します。

## 二、孤舟選者近詠

ゆきあひの空の高さや燕去ぬ

松手入れ句の推敲もかくあらむ

恩の字は大きな心秋彼岸

大切な人みな遠し星月夜

風を読み風乗りこなし鷹渡る

関係者近詠は、一月句会報から掲載させていただくこととなりました。お楽しみに!!

令和五年十二月 吉日

(了)